「リーフデ号佐伯湾漂着説」から

宮下良明
（会員・佐伯市二栄）

リーフデ号漂着について、会員村井強氏の所説が「佐伯史談」第一四一号、第一四八号に掲載された。尚続編が第一四九号に掲載されるとも聞いている。

かねて私は、村井氏の所説によって、漂着は私の居住地にも関係を有する事を知り、いたく興味を抱き、私なりに調査研究を続けて来たのである。成果は僅少ではあるが、以下私の意見を述べることとする。

佐志生黒島の地に、臼杵史談会の手により「三浦按針上陸記念碑」が建設されて二年以上の歳月を経た。此の間に、記念碑の外佐野市龍江院所有のエラスムス像の模刻像・資料館の設置等種々按針研究並びに顕彰のために尽力され、其の業績を高められた臼杵の方々の御努力と其の成果は高く評価し、尊敬の意を表する次第である。

併し乍ら、村井氏の所説を検討し、勘案する時、私としては、リーフデ号の漂着地を臼杵湾内佐志生海岸とする事には賛成する事が出来ないのである。当然乍ら、村井氏の佐伯湾岸漂着説に賛同するものである。以下その具体的な理由を二、三述べることとする。

先ず、昭和四十年頃、エラスムス像の模刻像を黒島に建立するに当って、その了解を得る為に、臼杵から二、三人の方達が、原像の所有者、栃木県佐野市の龍江院を訪れた。その時、同寺御住職大沢雄鳳氏は、

「当地（佐野市）では、リーフデ号の漂着地は、大分県の佐伯湾岸とされていますが」

と言われました。すると、臼杵の方達から

「イヤア、佐伯湾も臼杵湾も一緒（同じこと）ですよ」

という説明がなされたとの事である。

併しこの説明は、大沢師並びに佐野市側には承認され

なかった。後年（昭和五十四年三月）佐野市によって発刊された「佐野市の文化財」の龍江院所有・国指定重文「木造エラスムス像」の解説文には、「リーフデ号は慶長五年（一六〇〇年）太平洋で暴風に逢い大分県佐伯湾岸に漂着した」と、はっきり記載されている。この佐野市における佐伯湾岸漂着記事は、エラスムス像の研究家丸山互全氏の研究の成果に基づくものではないかと考えられる。

エラスムス像は、現在は保管を東京国立博物館に委託している。従って佐伯湾岸漂着という伝来の解説文も其のまま同館に引継がれている筈である。

この「佐野市の文化財」のエラスムス像の解説文は、佐野市の近くに住む親戚の者から偶然に入手したもので驚きと共に、リーフデ号と郷土佐伯湾との拘りに私を目覚めさせてくれたものである。

臼杵湾岸漂着説には、前記のような粗放な説も加味されているのである。

ディオゴ・デ・コウトの「亜細亜誌」に記された豊後内の地名シャチヴイを臼杵湾内佐志生とすることについて、臼杵側では、東大教授岡田章雄先生が

「シャチヴイは佐志生であったと思われる」

と仰しゃったから、シャチヴイは佐志生であるといっているのであるが、一方、岡田先生の方はいかがであろうか。

私は、今夏（昭和六十三年五月）栃木県佐野市に出向き、エラスムス像の所有寺龍江院を訪れる機会を得た。住職雄鳳師は他出中でお逢い出来なかったが、御家族の方達からリーフデ号に関するいろいろなお話を伺うことが出来た。

なお、この時幸運にも昭和五十二年NHKから歴史ものシリーズとしてテレビ放送された「龍江院のエラスムス像」の音声部分を、テープに録音させて戴くことが出来た。

NHK鈴木健二アナウンサー・岡田先生・大沢雄鳳氏の対談が収められて居り、その中で岡田先生は、シャチヴイを佐志生と推定した事情を次の様に語っておられる。

「（前略）　リーフデ号の着いた所がわからなかったのですが、幸い一六〇〇年豊後にオランダの船が着いたということを書いたポルトガル語の史料があり（ディオゴ・デ・コウトの「亜細亜誌」のこと）、これにシャチヴイ

というはっきりした地名が出る。シャチヴイはどこか分からないかと思って、人に尋ねたりしてから、臼杵の近くをずうっと海岸線を地図で探ったりしたところが、幸い、それは恐らく佐志生……で、今の佐志生ではないかということになり、佐志生と推定した。これは、私の推定でしたが、この推定が後に臼杵の方で受入れられて、今では佐志生に立派な三浦按針の記念碑が建てられております」

岡田先生には、御自身の推定が地元臼杵で受入れられた事に安堵し、大変喜んでおられる御様子が伺えるのである。

臼杵の方では、

「岡田先生が言ったからシャチヴイは佐志生である」

と言い、岡田先生は

「自分の推定は地元臼杵によって認められた」

とおっしゃり、まるで双方がもたれあった格好。あるいはお互いが責任を相手に預け合った形でもって、シャチヴイ佐志生同一説を支え合っているのである。不安定と言えるであろう。これでは、佐志生が何故シャチヴイなのかについての核心をもった説明は、全くなされていないと思われるのである。

私の居住する古江部落（佐伯市西上浦）海岸の東正面に、大入島北端部がのびて部落と向い合っている。大入島のそこは、唐船鼻・唐船浜・唐船磬という、一見、非常に変った地名の集中している所である。一般には、付近一帯を唐船とも呼んでいる。

村井氏は、この唐船に面した海面が、一六〇〇年四月二〇日リーフデ号が豊後に漂着して初めて錨を下ろした地点であろうと言っておられる。事実、唐船というような異様な地名が、何のいわれもなく、やたら付けられる筈はあるまい。

四百年前、佐伯湾内の此の地に、突然姿を現わした巨大な唐船にびっくりした沿岸住民たちが、その驚きをそのまま地名として残したものであろう。いうなれば、唐船の地名は、佐伯湾岸住民達による書かれざるリーフデ号漂着の記録といえるのではあるまいか。

また、部落右手南方には、地続きに二キロメートル程へだって指夫（させぶ）の港が所在する。村井氏は、この指夫の港を「亜細亜誌」に記載されている「シャチヴ

イの港」に該当する地ではないかと言っている。「亜細亜誌」に記されている。

シャチヴイに近く駐在していたパードレ達が漂着早々のリーフデ号を望見して、直ちに臼杵の太田一吉に報告すると共に、保護・援助を求めることにしたのも又、あらためて自分達も数隻の船を仕立ててリーフデ号の援助に向った。

のも、この指夫の港からであったと思われる。

指夫の港の現地は、海岸より直ちに水深があり、前に彦島・大入島が天然の大防波堤となって横たわり、四季年間を通じて全く風波を知らぬ良港をなしている所である。

太田一吉の治政下にあった当時、城下町臼杵と佐伯庄との間の物資運送に当っては、陸上険路の細々とした輸送に頼るより、大量輸送の可能な海路が多用され、その結果、この良港指夫の港は繁用されていたものとみられる。

発音の上から言っても、佐志生（さしゆう）より指夫（させぶ）の方が、ずっとシャチヴイに近似している。

なお、唐船碆と指夫間の海上距離は、ほぼ四乃至五キロメートルであって、アダムス書翰の陸地から一里の地に錨を下ろしたという記事に十分適合しているのである。

更に、東北の方には上浦町の半島が西から東に伸び、その中央付近は、大入島唐船からほぼ真北からやや東寄りの所に唐人碆という地名をもった浜がある。

二十日唐船碆に錨を下ろして、翌二十一日リーフデ号上では、病者のうち三人が死亡した。死体は水葬とされ海中に投ぜられたものと思われる。その死体の漂着した所が、多分、上浦町のこの唐人碆であったろうと村井氏は推測している。

私たちの浜でも小舟が流出した場合には、おおむねこの唐人碆の付近を捜索すれば、発見出来る確率の高い位置とされており、潮流がその様になっているのである。

このような地形を朝夕に眺め乍ら、私は此処こそその昔リーフデ号が漂着した海岸であったという確信もいよいよ深くするものである。

以上記したような諸点から見ても、リーフデ号の臼杵湾岸漂着説には少なからぬ疑問が感じられ、同説につい

ては再検討の必要を痛感するものである。

学術的な真実の追究は、専門学者の御研究に待たなければならないと考えられるが、リーフデ号の漂着については、私達の郷土佐伯に関する身近な問題として、我々も納得のできるまで真実追求のために、新たな角度からの解明に努力していきたいと考えている。